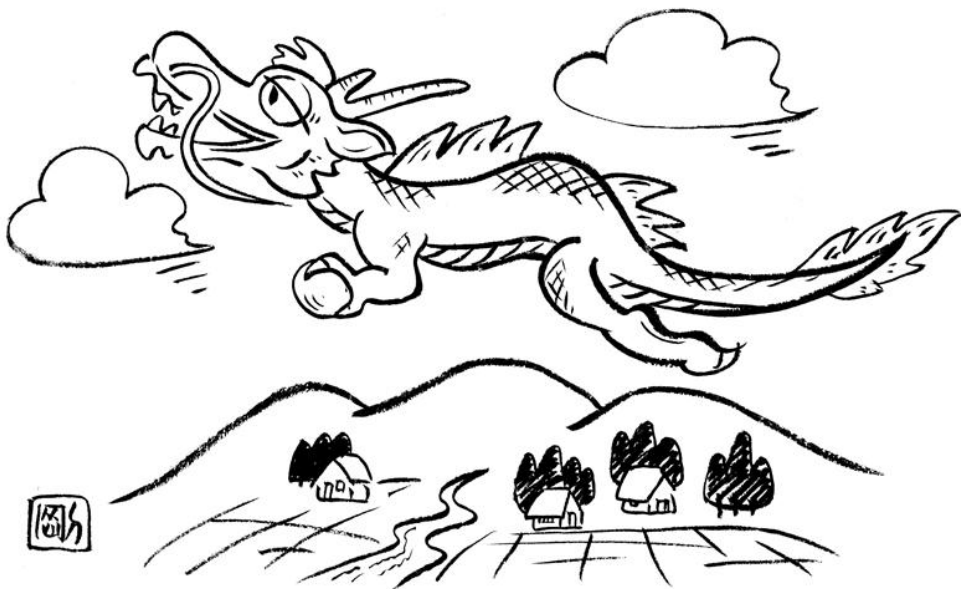


川内の竜の湯

豊前市の山田の谷、湯の迫という所に、人が住んでいない谷があつてな。そこは春になるとだんだん畑にれんげの花がさき、ここちよい風にわか葉がゆれ、ヒバリのさえずる声があるのどかな村里じゃ。だが、この平和な谷はな、昔は湯けむりがのぼつていたそうじゃ。それはな、こんな里につたわる、そりやおもしろい話じゃ。

この湯の迫んおくには妙見山という山があつてな。そこに世にもおそろしい大きな竜が住み着いておつたそうな。この竜がおこつて、さわぎだしたらもう大へんでな、だれも止めることができないじゃつた。そこらじゅうからお湯が出て、田んぼは死んでもうて、何も植えることができないことなるでな、村人は、いつもはらはらしていたそうじゃ。

その竜がな、川の水を飲み、時々妙見山から下りてくるのじゃ。村人は、そりやおもしろい生きた心地がせんでの、水飲む竜には知らんふり。竜に気づかれぬよつにひそひそ声。足音さえもしのはせて、息をころしてそおつと通りすぎておつた。



そして竜が山に消えるまで、遠くからじいっと動きを目で追い、神にいのりながらさわがないようにしておいたそう。村人の命の田んぼを守るためじゃったんじや。

そんな村人の竜に対する気持ちを知ってか、知らずか、心ないばかな男がいたそう。田植えが終わり、いねのなえが根をはろうとしてある田のことじゃった。山から下りてきて、いきおいよく水を飲んでいた竜を見つけたこの男は、

「おいこら竜。みーんなはおまえのことをおとしがってなあんにも言わんが、わしはおとしゅうもなあんともねえ。そげえいばるんじやねえぞ。」

それを聞いた竜は、そりや、もう、かんかんにおこってな、目をぎらぎら光らせあれくるい、あかい火をふき、ところかまわずあちこちの田んぼであばれ始めた。見る見るうちに、育ち始めたなえはしおれ、緑の田んぼが茶色にかわってしもった。つめたい田んぼの水もお湯にかわり、川からは湯気が立ち始めた。田んぼは死に、あつという間に、谷の木々や草花をも、からしてしもった。村里全部が死んでしもったように変わってな。それでも、村人はどうすることもできんじやった。

竜はいかりをおさめるどころか、山に帰らず毎日毎日あばれ回ってあった。村人は、どうしたもんかと考えるのだ

が、ただただ頭をかかえるばかりじゃったそう。湯を止め



緑の里にもどすには、竜を落ち着かせ山へ帰すしかない、村人は山の神様にいのりをつづけたんじや。

そんな村人のねがいが通じたのか、いのり始めて百八日目の夜のこと、山からつめたい水がわきでてきて、谷はみるみる緑がよみがえったんじや。そして、ふしぎなことに田んぼでねていたはずの竜は、朝方になるとすがたを消しておったそう。

村人は、

「田んぼが生き返った。」

「田んぼが生き返った。」

と、口々にさげびながら、目からは大つぶのなみだを流し、だき合つてよろこんだそう。本当によかったなあ。

今でも湯の迫に行くと、谷間をへびのようにくやくにや曲がって流れる小川があつてな、昔の『川内小学校』のそばの風呂元を流れておる。川そこにはすながなく、火山地帯にあるような石がころがっててな、温せん地のようでおどろいてしもつた。

そして村では、

「お湯が出てこんかな。出てくれば毎日温せんにも入れるんじやがな。」

と話しているそうじや。



湯の迫の谷